

10月中旬パリの劇場で日本舞踊を観た。日仏外交関係160周年を記念して開催されている、「ジャポニズム2018」という日本文化紹介事業の一環として行われたものだ。

演目は、「藤娘」、「八島」、そして「連獅子」の3つ。華やかさの中で描かれる娘心の微妙な変化、桂離宮を思わせるシンパルな舞台で繰り広げられる英雄義経の勇壮さと悲哀、そして獅子の親子が繰り広げる微笑ましくも動きのある舞台。いずれも満員のフランス人の大きな拍手を呼んだ。

公演後「八島」を舞った井上八千代さん(京舞)と、共演された地歌の富山清琴さん(共に人

新美術 時評

近藤誠一

と、相国寺の仏画3点というややこじんまりした展示だが、人数制限された会場の中では、多くのフランス人が会場を歩き来して、高度にデザイン化されながらも、いまにも動き出しそうな鶏の絵、そしてその綿密な筆使いに見入っていた。

日本舞踊であれ、若冲であ

の死に對しそこまで労をとること、そして自国の文化の多様性とレベルの高さ(アズナブルはアルメニア人)を誇りに思い、国民と共有することが当然とされる社会、それがフランスなのだ。

昔フランス人の友人が言ったことを思い出した。そのころ流行りだした「ヌーベル・キュエジューヌ」と、伝統的なフランスの田舎料理のどちらが好きかと尋ねたのに対し、彼は「どちらであるかは関係ない。大切なのは、それがおいしいか否かなのだ」と答えた。そしてフランスが人種差別することなく、多くの外国人亡命者やアーティストを受け入れることに話が及んだと

美とは

間国宝)が、フランス政府からレジオンドヌール勲章を授けられた。授与式での授賞理由を聞いて、フランス人がいかに日本の伝統芸能を研究し、その優れた芸術性や美意識を評価しているかを知って改めて感動した。

公演の合間に、たまたま開催されていた伊藤若冲展に足を運んだ。日本やアメリカでこそ最近人気絶頂の若冲だが、フランスではあまり知られていないという点で、当初人が入るかどうか心配された。しかしふたを開けてみると連日長蛇の列ができるほどの人気だったという。

宮内庁所蔵の「動植綵絵」30幅

れ、フランス人にとっては必ずしも十分馴染みのあるものではない。しかし彼らの反応は、その関心と理解の深さを表すものであった。それはここからきているのだろうか。

劇場内のレストランで文化芸術人とのサロンを開いた際、その答へのヒントが得られた。マクロン大統領が、最近亡くなった人気ジャンソン歌手アズナブルを悼んで行った演説の中で、「フランスでは詩人は永遠である」、「フランス語は夢と希望を与える言語である」と言ったという。

政治のトップが、一人の歌手の死に對しそこまで労をとること、そして自国の文化の多様性とレベルの高さ(アズナブルはアルメニア人)を誇りに思い、国民と共有することが当然とされる社会、それがフランスなのだ。

政治のトップが、一人の歌手

(近藤文化・外交研究所代表